

天に達した祈り

村松香子

三十年の月日がすぎた今でもあの時の息詰まるような祈りは、事あるごとに甦ってきます。その頃職員三名の小さな事務所働いていました。仕事は社労士の代行でした。

ある事務所から遺族年金の申請を依頼されました。乏しい経験と知識を傾けて書類を作成し、社会保険事務所に提出しました。

ある日、不支給と朱印を押されて返送されてきました。急いで不服申請書を提出。待たされること一年余り、今度は不起訴の朱印でした。

次の道は都庁の社会保険委員会への直訴でした。受け持ちの委員から、いきなり「許可すれば私は首ですよ」とつきはなされました。私は背筋がひやりとしましたが、「その声は聞かれその祈りは主の聖なる天に達した」との聖句がひらめいてきました。私は主の助けを確信して祈りつづけました。

一週間も過ぎない日になんと「支給」の書類が届きました。この世の法という患難は祈りと主のあわれみの前に砕かれたのです。